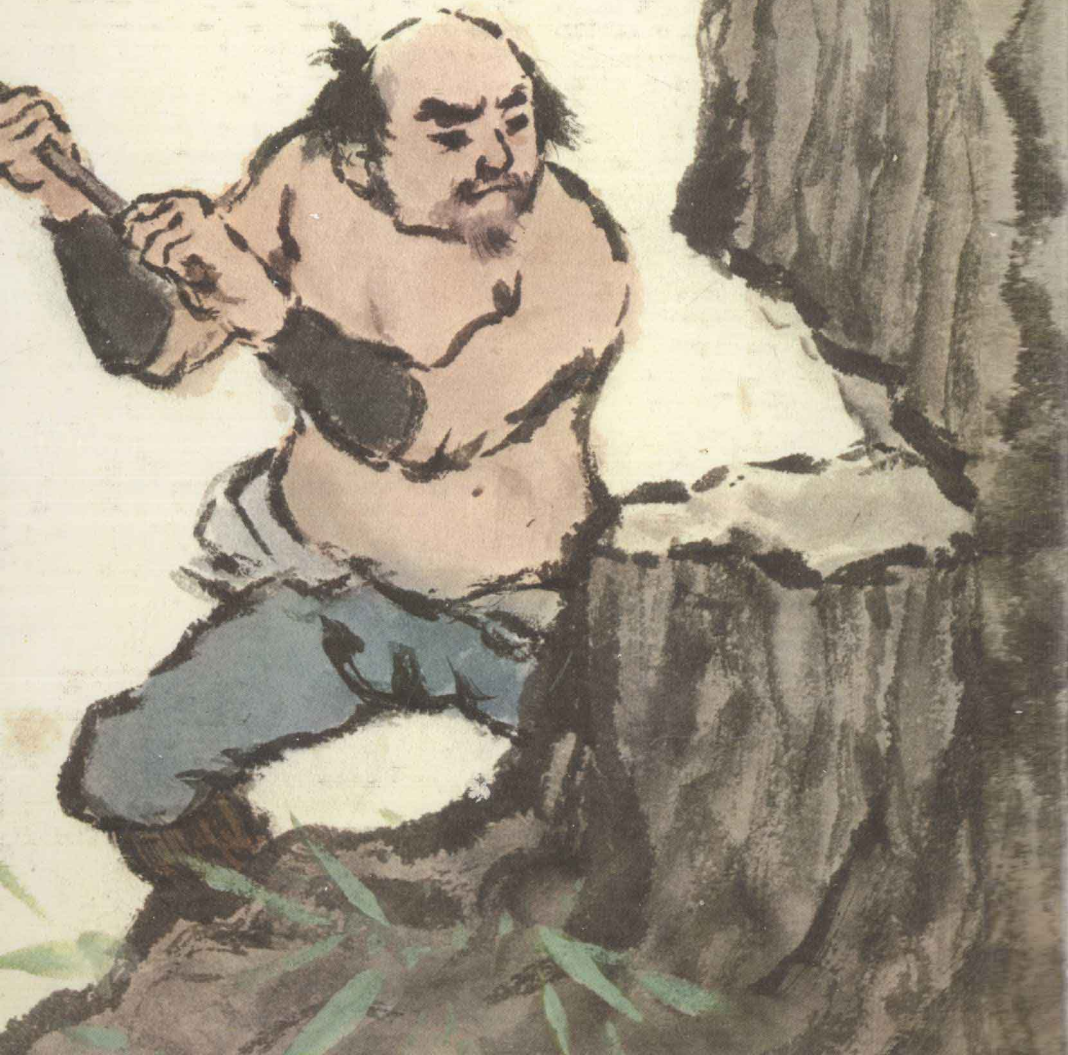


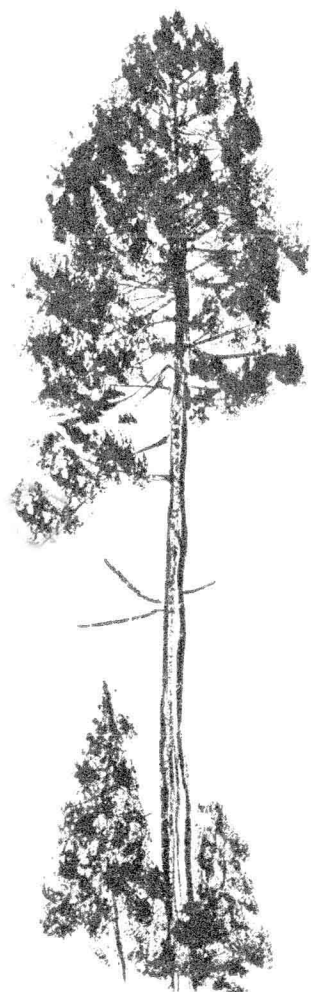
そ ま

木曾の杣うた



木曾の杣^{そま}うた

小野 春夫 作
箕田源二郎 絵



少年少女歴史小説シリーズ

木曾の杣うた

小野春夫 著

N.D.C. 913 東京 岩崎書店 1975 199p. 21cm

少年少女歴史小説シリーズ

■木曾の杣うた

一九七五年二月一〇日 第一刷発行 ©
一九七五年五月三〇日 第二刷発行

著 者 小野春夫

挿絵・装幀 箕田源二郎

発行 者 森山甲雄

発行 所 岩崎書店

東京都文京区水道一丁目九番二号
〒 一一二 電(812)九一三二(代)
振替 東京 九六八三二

印刷 所 第一印刷・三美印刷・松本印刷
製本 所 福島製本

(著者の了解により検印省略)

(分) 8393 (製) 231075 (出) 0360

はじめに

私をはじめて木曾の開田かいだから王滝おうたきの村をおとずれたのは昭和二十四年の夏です。濃濃いみどりの森林につづいて美しい草原がひろがり、その上に御岳山おんたけさんがそびえたっている開田高原は、いまでも忘れられません。けわしい西野峠にしのだうげをこえると西野のむらがあります。ここは木曾馬の産地で、馬が主人のここでは、馬が田や畑にはいらないようにするため、道という道の両側には馬の柵さくが山の方まではりめぐらされており、家に入るときは、いちいち柵の棒をはずして出入しなければなりませんでした。まことに村じゅうが牧場で、その中に家があるといった風景でした。

私はそのころ、明治維新のとき、それまで大名のものであった山林が国有林こくゆうりんといって国の所有となったときの話をきくため、青森や、福島、長野などの県をまわっていました。木曾をおとずれたのもそのためでした。

島崎藤村の小説『夜明け前』のはじめには「木曾路はすべて山の中である。」と書いてあります。木曾では郡ぐんの総面積そうめんせき一六八四平方キロの九〇％にあたる一五〇〇平方キロが山林で、耕地の面積はわずか三二平方キロ、郡の総面積の二％しかないというところをみても、木曾の人びとは、昔から山によって生きてきたと言っても言いすぎではありません。木曾の歴史、木曾の経済、そして木曾の文化も、すべて山林にむすびついていたわけです。ですから、いろいろな人びとからきいた話の

ほとんどは、木と馬のことでした。そのなかで忘れられないもののひとつは、伐った木を、けわしい山からはこびだし、筏に組んで木曽川を流す話でした。それは、きいている私でさえも、身がふるえるような、苦しくおそろしいことです。それを山の人びとは、あたりまえのようにはなしてくれたのが、印象ぶかく頭にのこっていました。

そのあと、映画のしごとでたびたび木曽へ足をはこぶようになって、二十年ほどになります。そのあいだに、『木曽式伐木運材図絵』や『木曽の山林をめぐる歴史』などの本が発刊されました。『木曽式伐木運材図絵』は、松村寛一という画家が、弘化二年（一八四五年）から八カ年にわたって木曽の深山幽谷を歩きまわって、杣や寄木の日用、筏ながしにたずさわる、はたらくものの姿を描いた貴重な絵巻を長野営林局で複写編集したものです。私はこれをみたとき、まえにきいた山のしごとの話が、あざやかによみがえってきました。

そんな思いをあたためながら、たびたび木曽の山へでかけていきました。御岳をのぞむ飛騨ざかいの山には、ヒノキやアスナロの樹海が盛上っていて、山から山を、遠くまでうねりつづいていました。そのような美しい景色も、年とともにだんだんかわっていき、伐採のあとがめだつようになっています。それは都会や工業が発達して、木材の需要がふえたからです。いま私たちの周囲には環境汚染ということが問題となっています。そして、森林をはじめとする自然をたいせつにしなければいけないという声が高まってきました。

私は長いあいだ、いろいろなところで、日本の森林のうつりかわりを見てきました。そのあいだ

に、むかし木曾の山ではたらいた杣^{そま}たちが、自分たちの力をあつめて伐木^{ばっぼく}、運材^{うんざい}の技術をかんがえていった苦勞をしらべていくうちに、そのころの杣が、山をうやまい、山の自然を愛していたことをしました。そのころがあったから、つらいくるしい山のしごとにもくじけず、りっぱな技術を完成することができたのだと思います。わたくしはそのようなかんがえで、この物語を書いていました。

ここに書いた人びとのなかには、実在の人も、また、私の空想した人もおり、それをもとに創作したものです。

この本を書くにあたって、多くのかたのお世話になりました。この作品と直接関係はございませんが、長野営林局の吉越大八さんと今井廉さんには、木曾へゆくたびにご案内していただき、いろいろおおしえをうけました。また、長いあいだ何かとはげましてくださった来栖良夫さんと、岩崎書店の豊田匡介さん、りっぱなさし絵をかいただきました箕田源二郎さん——みなさまにあつくお礼申しあげます。

小野 春 夫

逃亡^{とうぼう}

71

山刀^{なた}

57

飛驒^{ひで}の商人

43

代官^{だいかん}と名主^{みょうしゅ}

28

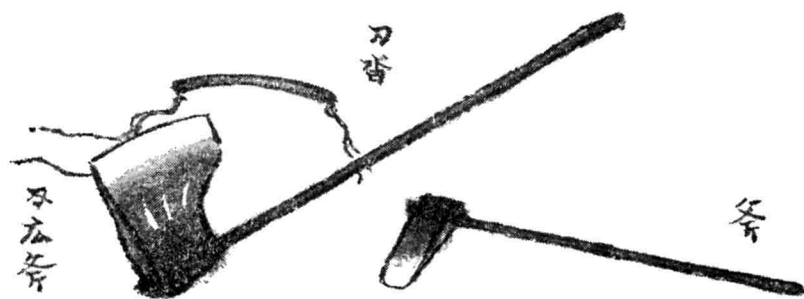
杣歌^{そまうた}

15

春^{はる}の木曾路^{きそじ}

8

もくじ



藤三郎おあずけ 88

わらじの大王 98

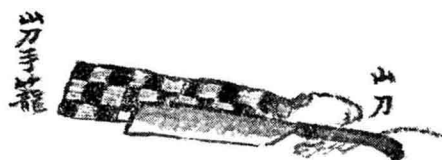
鷹の巣 108

木曾の関ヶ原 126

寄木小屋の茶坊 141

鉄砲水 161

ヒノキの花 184



挿絵・装幀 箕田源二郎

▼おもな人たち

永井弥太夫^{ながい やだゆう} もと木曾義昌^{よしまさ}の家臣であつたが、義昌が、豊臣秀吉のため下総^{しもうさ}に移されたとき、さむらいをやめ、そのまま村に住みつく。のち杣総頭^{そまそうがしら}となる。

藤三郎^{とうざぶろう} 紀伊^{きい}の国からきた杣^{そま}。父の重兵衛^{じゆうべゑ}は、木曾へ杣の技術をおしえにきて、殺された。父をたずねて木曾へきた藤三郎は、そのままとどまり、石河代官^{いしかわだいかん}が他国の杣などを罪におとしいれようとしたことに、抵抗する。のちに、山落し・小谷狩^{こたがかり}の新しい技術をつくる。半四郎^{はんしろう} 木曾の杣。藤三郎の下で杣や、寄木^{よぎ}の技術ならぬ、他国の杣などを、山役人の手からまもる。小谷狩^{こたがかり}の工事の途中で、水にながされて死ぬ。

茂作^{もさく} その子。貧しい杣の子として、母をたすけながら、木曾馬のめんどろをみ、鷹の子を訓練し、飛彈^{ひだ}へにげる由蔵^{よしぞう}をたすける。大きくなって杣になる。

由蔵^{よしぞう} 飛彈^{ひだ}からきた寄木^{よぎ}の日用^{ひよう}。石河代官^{いしかわだいかん}の山役人によって、罪におとしいれられたが、木曾の人たちのたすけで逃亡に成功する。山村代官^{やまむらだいかん}にかわつてのち、ふたたび木曾へもどり、山落しや小谷狩^{こたがかり}の技術をかんがえる。

石河備前守^{いしかわびぜんしゅ} 光吉^{みつきち} 犬山城主^{いぬやまじようしゅ}。豊臣秀吉^{めい}の命で木曾の森林をとりしまるが、そのあいだに材木をごまかして金もうけをし、関ヶ原^{せきがはら}の敗戦とともに、逃亡する。

同心^{どうしん}、原伝七^{はらでんしち} 石河代官^{いしかわだいかん}の山役人の命令で、他国の杣などを罪におとしいれる役目をする。のちに、木曾川で木材ながしの人夫となる。

春の木曽路

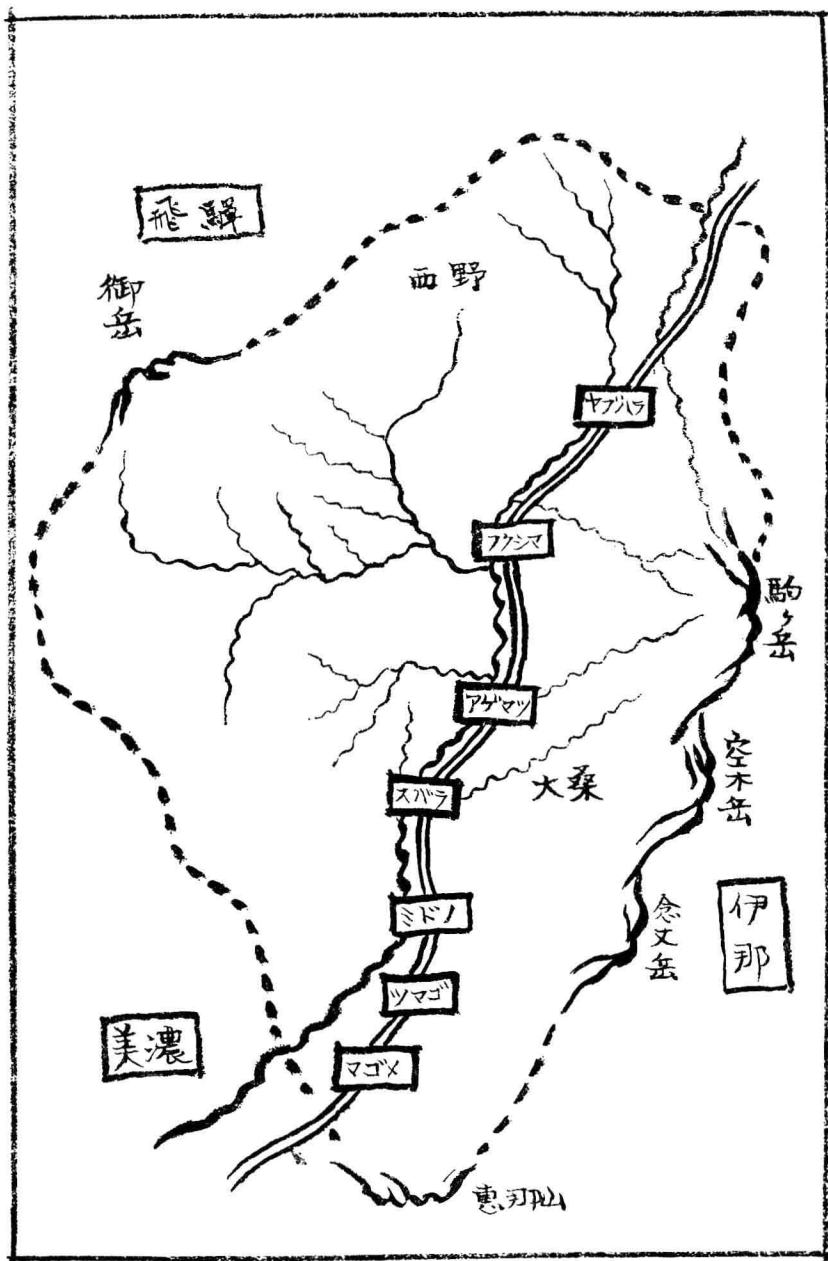
さわやかな五月の木曽川ぞいの道を、木村左近は福島へといそいでいた。

左近は美濃（岐阜県）犬山城主石河備前守光吉の家来で、土井役をつとめるさむらいである。山ばかりの木曽（長野県）には、米や麦をつくる田や畑はほとんどなかった。そのため百姓は山の木を伐って土井や樽にきざんで年貢とした。これを本年貢といって、土井役はそれをしらべて、うけとる役であった。

土井も樽も、つくり方はおなじで、みかんを丸のまま横にきると、ひとつひとつのふくろは、外は大きいが中になるほど小さくなっている。そのような形に木をわり、樽は底辺と高さが四寸（やく二二センチ）上が二寸五分（やく七・五センチ）。つまり台形にきざみ、五尺二寸（やく一・六メートル）の長さに切った。土井はそれより倍ぐらい大きめにきざんだ材木であったから、ヒノキやアスナロのような質のよい、大きな木でないとできなかった。

ゆうべおそく犬山城から使いの者が、一通の書きつけをもって妻籠の役所へきた。何がかいてあるのかしらぬ。ひとときも早く、それを福島のだ官石河兵藏さまにとどけるようにとの上役の命令で、けさ早く、したくもそこそこに出発したのであった。

妻籠から杣道をおって大桑村の弓矢という部落にぬけると、そこから木曽路にでる。杣道は山



へゆききする杣だけしかしらない道で、ときにはやぶのなかで見うしなつてとほうにくれることもあるが、旅の人がとおる木曾路より二里（やく八キロ）も近いので、いそぎのときは山の人はこの道をえらんだ。

そこから川ぞいの道は、けわしい崖^{がけ}づたいであつたり、あるところは数十間^{けん}（一間はやく一・八メートル）の深さにのぞむ谷に木を伐^きつてならべ、藤^{ふじ}づるでからめた橋をわたるところもあつた。上松までの川はうねり、水はさかまきとびかえり、立つてみるものの目をくらますほどであつた。急な流れは岩の根をほり、そのためできた穴に岩がころび、それをくりかえす。大石が川の上^{かみ}にながれるというのは、このことであつた。橋^{たちばな}南溪^{なんけい}という人がかいた『東遊記』に「日本は一つの島山^{しまやま}にして、その島山の絶頂^{ぜつちよう}というのは信濃^{しなの}なり」とあるが、木曾はその信濃の屋根にあたりに、ここを源^{みなもと}としてながれる木曾川は、日本三急流のひとつにかぞえられている。

信濃の国の南には、駒ヶ岳^{こまがたけ}や空木岳^{うつぎだけ}が^{のりくだけ}つらなり、その東は伊那^{いな}、西を木曾といつて、ともに山の国であつた。木曾は西に御岳^{おんたけ}、乗鞍岳^{のりくだけ}をへだてて飛驒^{ひで}、南は美濃^{みの}（ともに岐阜県）につづいている。東西十一里^り（二里はやく四キロ）南北十九里、面積十八万七千町歩^{ちやうふ}（十八万七千ヘクタール）のほとんどは山であつた。

天正十年（一五八二年）織田^{おだ}信長^{のぶなが}が、木曾のヒノキで伊勢神宮^{いせじんぐう}の建て替えをおこなつてから、京都の名のある神社や寺の建築には、木曾のヒノキが用いられるようになった。そして豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が、この木をつかつて大坂城や聚楽第^{じゅらくだい}をきずいたため、木曾の森林は天下にしられるところとなつた。

その中でもヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ、コウヤマキは、木曾の五木ごぼくといわれて歌にもうたわれた。ほかにモミ、ツガ、トウヒの針葉樹しんようじゆや、ナラ、ホオ（朴）、トチ（栃）などの広葉樹こうようじゆもはえていた。

青あおとしげるクヌギや、トチの林のなかに、おそい山桜が一本咲いていた。川の岸をぬうようにひらいたけわしい道を、わらじの足をふみしめふみしめて空をあおぐいとまもないほどに、けんめいに上っていた木村左近の目に、それは、ほっとなごむものがあった。花は、おりからの山風にふかれてひらひらと散っていった。

岩をかんで流れる水には、まだ雪のにおいがあつた。木曾の八百八谷はつひやくやたにのふかい谷のおくでは、いま雪どけの最中さいちゆうである。駒ヶ岳こまがたけは黒ぐろとしげるヒノキの山の上に、白い雪をかがやかせてうつくしくそびえていた。

寢覚ねざめに近いとうげの上にこしをおろし、ひと休みしていると、馬のあし音がのぼってきた。ヒノキの樽ふれをつんでいる。馬のいきづかいがはげしいのは、この坂道に、よほど荷にがこたえるのであるう。

百姓は、左近のすがたをみつけると、おどろいたように笠をとり、頭をかがめてとおりすぎている。

左近は、かるくえしゃくをかえしながら、役目のかんで、木年貢きねんぐをおさめにいくところだ、ときつした。



あるく道すがら、それとなくみた山のすがたの移りかわりは、左近にとっておどろくばかりだった。二年まえ、三殿みどのから福島までの川すじの森をしらべにまわったことがあった。そのころのむかいの山には、ヒノキやサワラのしげみに、ナラやクルミのみどりがうつくしかった。

いまみると、へたな髪床かみどこ（とこや）が刈った頭あたまのように、木は伐きられ、そのときに折れたり、伐りそこねて裂きけた木が、そのまますてられて、すけた林には、かさなりあった大きな岩が、遠くからでもみえた。

川岸かわみづには大水でながれた木が、打ちあげられたまますてられている。

豊臣とよとみの世よになってから、ものごとがはでになり、こまかいことに気をつかわない御時世ごじせいだといわれているが、このような無駄むだをする一方いつぱうで、きびしく木年貢きねんぐのとりたてをしている。これでは、木曾の山にいくら木があってもたまったものではない、と左近はまゆをしめた。

熊や鹿やかもしかの皮、熊の胆い、ヒノキ笠などを売っている家のある、上松あがまつの宿しゆくをぬけると、街かみ道どうはまた川ぞいにはしる。流れの音にまじって、うぐいすやかっこうの声がきこえる。御岳おんたけが、めずらしく美しいすがたをはつきりとみせていた。

家いえにあまりがつくころ、左近は福島について、その足ですぐ城山しろやまにある代官所だいかんしょへいった。

多くの人は昼のしごとをおえて家にかえていたが、代官だいかんの石河兵藏いしかわひょうざうと二、三の重臣じゆうしんがのこっていた。左近さこんはさっそく、書状を代官にわたした。

「犬山城主いしかわみづよし石河光吉さまからの書状でございます。」

光吉の弟にあたる石河兵蔵は、書状をひらいて、目をとおしていくうちに、手がふるえ、顔色が変わった。よみおわると、それを家来にまわしながら、

「とうとう、太閤さまがなくなられた。」

とつぶやくようにいった。

秀吉が病にたおれた、というはなしは、きょねんのはじめごろから木曾にもつたわっており、なかには、もう死んだらしいと、うわさするものもあった。

やがてしまいのものが、顔をこわばらせて書状をかえした。代官はそれをうけとりながら、

「豊家（豊臣）にまちがいがおきねばよいが。」

おもわずことばをもらした。

豊臣秀吉は、はやくから木曾の森林に目をつけていた。天正十八年（一五九〇年）天下を統一すると、ここをおさめていた木曾義昌を下総（千葉県）へうつし、自分でじかに支配することにして、犬山城主の石河備前守光吉をとりしまりにあたらせていた。

代官のしごととは森林のことだけではなかった。かつて木曾義昌に仕えていたものが、村にはいり名主となつて力をふるっており、また、飛驒や、紀伊（和歌山県）、吉野（奈良県）など、他国から柚がきている。それらをみまもりながら、百姓から木年貢をとりたてる役目があった。

書状には、太閤さま亡きあと、もし国がみだれるようなことがあっても、これらのものが外からはたらしかけで、うごかされることのないよう、とりしまりの方法がくわしく書いてあった。